

すべての光があなただけにくるのではない

ジャンヌ・ダルク

もっと光を

ゲーテ

二〇三〇年、九月一日、午前十時。

竹田金之助はまだ郷田邸の二階に籠っている。

完全な自閉症状態である。

郷田が心配してときどき顔をのぞかせるが、返事もできずに憔悴している。

窓のない部屋なのに電気をつけていない。

隅で丸まっている。

後悔には、

「やってしまった」

「やればよかった」

の二通りがあると云われる。

だが、金之助の後悔は両方なのだから厄介だ。

(スイッチを押してしまった)

後悔と、

(麻暮先生たちが帰って来てから押そう、との郷田の提案を素直に受けなかった)

後悔とである。

目の前が真っ暗で、真っ暗のなかで生きている。

「たまには外の空気を吸ったほうがいいわよ」

「たまには気晴らしにテレビでも観たらどうなの」

「たまにはあたしの仕事を手伝ってみない」

何度声をかけても返事はなく、たまに返ってくる言葉は、

「それはしないほうがありがたいのです」

まるで、メルヴィルの、  
『バートルビー』

そっくりだと思えば、郷田は頭を抱えた。

郷田特製のスープを啜るだけだから、もともと瘦身の軀が痩せ細ってしまっている。

それでもこのスープには滋養が満タンだから、死ぬことはない。

あの日、郷田と金之助は賭けをした。

『そう、くそつたれ蝶子が餓死したら、あたし（郷田）の勝ち』

『はい、猪鹿さんが荒野に助けられたら、自分（金之助）の勝ち』

金之助が賭けに勝った。

そのことを郷田は金之助に伝えたが、逆効果だった。

これでは郷田も、小林金助にあれこれ報告もできない。

ここまでになったら、金之助をこのままにしておくわけにはいかないと、郷田はだれに相談しようか考えた。

金之助の父親の金助のことは最初からはずして、まずは山風健一署長のことを考えた。

だが、海底都市と巨大コード爆破を相談していない以上、何としても云にくい。

次に「帰路」の立原正男を考えたが、あそこはいまや美村麗子の行きつけになっている。

気落ちしているにちがいない麗子には会いにくいし、もしかすると会いたくない猪鹿（荒野）蝶子だって現れるかもしれない。

そこで考えたのが（未来計画カンパニー社長岬美々のママ）岬奈々であった。

奈々は郷田のお得意様であり、多くの難題を解決してあげたから、郷田には恩も感謝もあるはずである。

それよりも、各界につきあいが広いから、良いカウンセラーを紹介してもらえるかもしれない。

よしと決めたら即行動が郷田のやり方である。

朝食中だったら電話は邪魔だろうと考えてメールを送った。

【お久しぶりだけど、ちょっと相談したいことがあるの。近いうちに訪ねて行ってもいいかしら】

返信はすぐに来た。

【あらまあ、郷田さまー、おかげさまで美々も順調にやってるし、私はストレスがないし、また十も若返っちゃったじゃなーい。探偵さんに依頼することがない人生って最高でございますわねー。そうそう、訪ねて頂く必要はございませんわ、明日朝から鵜沼でヨガレッスンに参加致しますから、お昼ころにこちらからお伺いしますわねー。美味しいランチを作って待っていてくださるかしら。ちなみに相談って

婚活でしょ、いい相手がいるのよん、宝塚の男役出身で、あら、詳しいことは明日でいいですわねー】

郷田は渋い顔をしつつも、すぐにメールを返した。

【ありがとさん、待ってるわね。あたしのランチを食べて、もっともっと若返っちゃってね】

二〇三〇年、九月二日、正午。

郷田は邸宅で岬奈々を迎えている。

奈々は相変わらず派手な恰好で、美容整形手術のおかげで、また若くなっている。「郷田さまったら、まだランチの用意をなさってないのー」

ヨガを真面目にやるとね、お腹が空くでございますのよー」

「準備はできてるのよ、あとは焼くだけ。」

奈々ちゃんに、あったかーいランチをご馳走しようと思ってさあ」

すぐさま郷田はキッチンに行ってエプロンを付け、用意しておいた特製ハンバーグを焼き始めた。

奈々はキッチンを覗き込みながら、まだ時間がかかると踏んで、世間話に花を咲かせる気が満々。

「郷田さまー、身体の硬い殿方は、ヨガを苦手らしいですわ。」

「ねえ、男性と女性の違いって、身体だけかしらねー」

「奈々ちゃんったら、それをあたしに聞こうって言うの」

「郷田さまなら、そのあたりばっちり答えられるんじゃないかと思ひましてねー」

「そうねえ、男は冷蔵庫や冷凍庫から目当ての食材を見つけられないかも」

「郷田さまは食材そろえてばっちりねー」

「そうねえ、男は喜怒哀楽を顔に出すのを恥と思ひ込んでいるかも」

「郷田さまは私に会った喜びが顔だけでなく身体中からあふれているわねー」

「そうねえ、男は女に相談したりアドバイスもらうのを厭がるかも」

「私に相談があるなんて、郷田さまは可愛いわねー」

「そうねえ、男は感情的になる女を扱いかねるかも」

「郷田さまは、女扱いが上手いものねー」

「そうねえ、男は女を見ると、やれるかやれないかをまず考えるかも」

「郷田さまもそうなってほしいわねー。私はやれるほうよー」

郷田はばかばかしくなって、ウエルダンにするつもりだったが、もうレアでいいやと、

「さあ、ハンバーグができたわ。」

サラダもできてるし、フランスパンとポタージュスープ付きよ」

「わあ、ランチだランチだ、嬉しいなー」

奈々はテーブルにつくのが先かハンバーグを口に入れるのが先か、と云った調子で食べ始める。

「お世辞抜きで美味しいわあー。

ハンバーグも男もレアにかぎるわねー」

郷田は金之助のことを思うと食欲が出ない。

奈々がさっさと食べ終わって、本題を聞いてくれるのをひたすら待っている。

奈々はたったの三分で食べ終えたが、郷田には三時間に思われた。

「ごちそうさま、じゃあ、またねー」

奈々は帰ろうとする。

「ちょちょちょ、ちょっと奈々ちゃん、あんた何のために来てくれたのよ」

「ランチをご馳走になるためじゃなかったかしらー」

「あたしが送ったメール見直してよ」

「冗談に決まってるでしょー。

郷田さまからの相談なんて初めてなので緊張しているだけよー」

「あたしも珍しく緊張してるんだけどさあ」

と前置きしてから、郷田は金之助がどうして自閉症になったかを、簡潔に説明をした。

「何それー」

奈々は複雑な表情になった。

「何か心当たりがあるのね」

郷田は突っ込んだ。

「心は別としても当たりよー。

だって、鉄仮面の先生なら、ウチで療養してるわよー」

「えっ、麻暮さんは無事なの」

青天の霹靂とはこういうことかと郷田は思った。

信じられないが、信じたい。

「詳しいことは、私には解んないのよー。

娘の美々が、川上宙門って人と結婚したって、ふたりで挨拶に来たのよー。

そのときにさあ、瀕死の鉄仮面をクルマに乗せていてさあ、ウチで療養させてくれて、勝手よねー。

川上さんの話では、命を助けられた玄さんって人の命を助けるつもりで、何かしたらしいんだけど、玄さんは亡くなって、鉄仮面が生き残ったんですとさー。

でもさあ、鉄仮面の先生が青息吐息で、医者も呼ばないでくれ、だれにも内緒にしてくれ、それにふふふ、あなただけが頼りだなんて云うもんだから、これだけしか喋れないわよー」

これだけ喋れば充分。

郷田には万事呑込めた。  
郷田は麻暮のことを宜しく頼み、奈々を見送った。  
それからハンバーグランチのトレイを持って、おもむろに金之助の居る二階にあがって行った。

郷田は電気をつけると、(玄のことは云わずに)  
(奈々の話では、麻暮は生きていて、岬邸で療養している)  
ことだけを伝えた。  
金之助の愁眉がひらいた。  
金之助は安堵の涙を流しながら、ハンバーグランチのトレイに瘦せた手をのばした。  
(これで金之助さんは恢復し、金助さんにも報告ができるな)  
と思うと、郷田も安堵した。  
すぐに郷田は、美村麗子にメールを送ろうとしたが躊躇した。  
麗子のことだから、麻暮が生きていと知ると、感情を高ぶらせたまま岬邸に乗り込むに違いない。  
そうなると余計に、厄介な話になる気がした。  
つまり重病人を奈々と麗子で取り合う、なんてことになりそうな気がしたのだ。  
気がしたどころか、それは次第に確信になっていった。  
麻暮の容態が落ち着いたら連絡すればいい、と決めたのだった。  
そんなことよりも、金之助が元気になったら一緒に未来コスモス院の金助を訪ねようと考えていた。

二〇三〇年、九月十日、午前十時。

荒野大三郎と荒野(旧姓猪鹿)蝶子は、未来計画カンパニー十三階、開かずの間の奥のメンテナンス室に居る。  
そこはすっかり改造されて、荒野夫婦の新居になっている。  
ソファに坐った蝶子が、キッチンで朝食を作っている黄金仮面にさりげなく声をかける。  
「ねえ、最近軀が妙な感覚なので、念のため試験紙でチェックしてみたら、妊娠の色に変わっているの。  
もしわたしに赤ちゃんができたら、処女懐胎ってことになっちゃうわね」  
荒野はさほど驚かず、それでも歓喜の声で、  
「プフイ、オオ、プフイ。  
私ハ、コノ時ヲ待ッテイマシタ」  
「意味が解らないわ。

わたしはキリストでも産むのかしら」  
「オオ、オオ。  
蝶子サン、キリストデス、キリストデストモ。  
貴女ト私ノ子供ガ、生マレルノデス」  
「バーチャル・セックスで、いやもしかして人工受精とか」  
「ソノ、モシカデス。  
私ガ貴女ノ軀ニナッタ時、アラカジメ保管シテオイタ、私ノ精液ヲ、木下ノ医術  
デ、着床シテモラッタノデス。  
デスカラ、私ガ貴女ノ軀ノ時、スデニ妊娠シテイタノデスヨ。  
モウスグ、妊娠三ヶ月デショウカ」  
「まあ、そんなことを」  
と、蝶子は呆れ声を口走ったが、まんざらでもない表情だった。  
「イズレニシテモ、私ノ念願ガ叶イソウデス。  
ヤリカタハ卑劣カモシレマセンガ、貴女ト私ノ子供ガ、ドウシテモ欲シカッタノ  
デス」  
「それはわたしも同じよ。  
これで名実共に夫婦ね」  
「プフイ。  
私タチハ夫婦以上デス。  
共ニ歩ム同志デス」  
「でもわたしは世界壊滅なんか望まないわ」  
蝶子は断固たる口ぶりで言った。  
「モウ私ハソソナ野望ハ捨テマシタ。  
生マレテクル子供ノタメニ、平凡ナ子煩惱ニナリマス」  
良かったわ、と蝶子は吐息とともに云った。  
「夫婦になった甲斐があった。  
わたしがあなたに惹かれたのは、もしかするとその野望に惹かれたのかもしれない。  
けれどもこれからはきっと、平凡な子煩惱である夫に惹かれるでしょう」  
蝶子はしみじみと述懐した。  
だが蝶子は気づかなかった。  
黄金仮面の奥の両眼が無気味な光を放っていることを。

二〇三〇年、九月二十日、正午。

麗子は、七里が浜に近い産婦人科の診察室で医者 of 答を待っている。  
「おめでとうございます。

妊娠三ヶ月です」

期待が確実になって、麗子は思わず拳を握って、

「やった」

と云った。

云ってしまってから、照れ笑いをした。

だれよりも容姿に恵まれた従姉とちがって、だれよりも容姿に恵まれない麗子にとっては、出産なんて夢のまた夢であったのだ。

(もし美容整形手術をやっても、どうせ従姉に適うわけもなく、やる気はまったくなかった)

そんな自分が妊娠したのだ。

やったを百回くらい叫びたかった。

「まだ結婚はなさっていないようですが、問題はありますか。

この病院では墮胎も受け付けておりますが」

医者は(麗子にとって)余計なことを云った。

「子供の父親は行方不明、いえ、亡くなっている可能性があります。

不死身ですから、亡くなった可能性は100%ではありませんが。

私は彼を尊敬しています。

子供はひとりでも育てるつもりですから大丈夫です」

麗子はわざと力強く云った。

医者は麗子の顔を伺いながら、

「いまから力んでいては長続きしませんよ。

子育ては長い楽しみですが、長い試練でもあります」

「解りました。

その言葉を肝に命じておきます」

と云ってから、麗子は診察室を出た。

秋晴れだった。

雲のかけらもない晴天だった。

(そうか、空ってこんなに青かったんだわ)

麗子は微風に髪を靡かせるままにした。

自分の髪が従姉よりも美しいことを、麗子は自覚していなかった。

それでも陽の光が、自分だけを祝福してくれている気がした。

容姿に対するコンプレックスなんか、妊娠の事実の前では、くだらない些細なことに思われた。

思い切り吸った空気は澄んでいた。

原発事故もあったし、よその国では原爆実験もしているから、空気は実は澄んでいないのかもしれないが、いまの麗子には、たとえスモッグまみれの空気であっても澄んでいると感じる他はなかった。

湘南の潮風の香りがした。

この香りは、麻暮正作の香りだと麗子は思った。  
麗子はこの足で鎌倉八幡宮に参詣するつもりで、鎌倉の町並みまで歩いて行った。  
すると美村さん、と声をかけられた。

「ウチに来るところですか」

今日は寄るつもりがなかった「帰路」だった。

立原の顔は少し上気していた。

「今日は八幡宮へ。」

立原さんはどちらへ」

「午前中で店仕舞いをして、これから郷田さんのウチへ行くのですよ」

「あら、何か急用で」

「美村さんは呼ばれていないんですか。」

岬邸で療養していた麻暮先生が回復されたので、郷田さんの処でお祝いを」

「えええ」

と麗子は歓声を挙げた。

思わずスマホを確認すると、郷田からのメール・メッセージが入っていた。

【あたしなりの考えがあつてね、しばらく内緒にさせてもらったんだけどさ。麻暮さんが無事でようやく回復したから今日はお祝いなのよ。出て来てくれるわね】

「美村さんをごぞんじなかつたのですか」

立原は怪訝な顔をしたが、麗子は頓着せずに、

「それはいいの、郷田さんなりの深謀遠慮があつたのでしょうから。」

ああ、麻暮さんが無事でいてくれた。

そのことが大事、そのことが総て。

ああ、なんて幸せなんでしょう。

この世にこんな幸せがあるなんて、立原さん、ほっぺたをつねってみてください」

麗子の感涙をいささか鎮めるためか、立原は自分のほっぺたをつねって、麗子を笑わせた。

「とにかく一緒に行きましょう」

「はい、ぜひ」

二〇三〇年、九月二十日、午後一時。

麗子と立原は郷田邸の玄関に居る。

「何か様子がおかしいですね」

耳を澄ませて立原がつぶやいた。

「お祝と云うよりも、お弔いと云う空気ですね」

麗子は第六感でそう感じた。

「読経が聴こえますね。

あれは金助さんの声でしょうか」

立原はチャイムを鳴らすのもドアを開けるのも躊躇っていた。

「静かに中に入りましょう」

云って麗子はそっとドアを開けた。

応接間には、麻暮正作、郷田狂介、竹田金之助、小林金助の四人が居た。

小さな祭壇が作られていて、簡素な供花と供え物の向こうに玄治の遺影が飾られていた。

線香の煙が広い応接間の中央に、流れ漂っていた。

読経はやはり、車椅子の金助だった。

読経が終わると、郷田がわざとらしく明るい声を出して、

「お疲れさま、玄さんのお葬式はこれで終了。

これからは麻暮さんの快気祝いよ。

立原さんも美村さんもようこそ」

「郷田さんらしく、さばけてますね」

そう云うしかない立原がそう云うと、

「たしかに、さばかないと、やってられんよな」

金助がしみじみと応じた。

「さばこう、さばこう、それが玄さんの望みでもある気がするよ。

ボクの快気祝いと云うよりも、こうして仲間が再び集えた祝いとしよう」

麻暮がそう云ったので、郷田は酒類と肴とフルーツをテーブルに並べ始めた。

その間、麻暮は金之助の問いに答えて、あの日の観音崎の海でのあらましを言葉すくなく解説した。

〈玄治と共に、予定通り観音崎の海に入った。

海底都市に近づいて行った。

だが妙なのは、ロボットたちのいる気配がないことだ。

川上が裏切って、再度バリアーが張られたかと考えた。

それでも玄と、それぞれ海底都市の中心部と巨大コードの付根に時限爆弾を据えた。

ふたりともあらかじめ死は覚悟していたし、機会はまたとないと思われたからだ。

戻ろうとすると、バリアーに邪魔された。

どうもがいても、戻れない。

今回のバリアーは遠隔操作を妨げるばかりでなく、海底都市に近づいた者が戻れないものであった。

玄とお互いを見詰めたまま観念した。

すると、何の前ぶれもなくバリアーが解除された。

(このとき丁度郷田と金之助がボタンを押したのだらう) 同時に時限爆弾が爆発した。

軀が粉々になる寸前、バリアーの外へ玄が突き飛ばした)

「玄さんが」

と云ったなり、金之助は落涙した。

「そう、まちがいなく、玄さんがボクを助けてくれたのよ。

そのころ、荒野は姑息なやり方で、猪鹿さんに救われた。

こうなれば、玄さんの弔い合戦をやらねば、玄さんの魂も浮かばれまいよ。

もしまた猪鹿さんが荒野を庇うことがあったら、彼女も敵として扱わねばならんでしょうな」

このとき思い余って麗子が口を挟む。

「お願いですから、もう殺し合いはやめてください。

もし本当に荒野さんが人類壊滅を企てているのなら、やらせてあげればいいじゃないですか。

いいえ、いま荒野さんにはお蝶さんがついてます。

お蝶さんが荒野さんに、そんな莫迦莫迦しいことやらせるわけはありません。

ですから、これからの麻暮さんは人類の守護人などと云う偽善者ぶった人殺しの肩書きは捨てて、平凡な子煩悩に変心すべきではないでしょうか」

麗子の台詞に金之助は黙っていなかった。

「聞き捨てになりませんね。

荒野に蝶子がついているから、余計に問題なんじゃありませんか。

それにいったいどういう権利と根拠があって、麻暮先生に対し偽善者ぶった人殺しなぞと云えるのですか。

平凡な子煩悩に変心すべきとはどう云う意味なのですか」

麗子は赤面し下を向いた。

「まあまあ、金之助さん。

ある意味ボクは、偽善者であり、人殺しでもありますから、美村さんは正直なだけなんですよ。

尤もボクは、いや荒野とボクは、〈悪〉と〈善〉ではなく、〈陰〉と〈陽〉だと思っ

ていますが。

それに、男はだれだって内心は平凡な子煩悩になりたがっているものなんです。

ボクだって例外ではありません。

ケケ」

麻暮の救い舟に麗子は烈しく顔をあげ、

「できたんです、できたんです」

できたとは、と鉄仮面が首を傾げた。

「なにができたと云うんです」

「麻暮さんの子が、私のお腹のなかに」

麗子の眼が潤んだ。  
「まさか」  
「そのまさかができたんです」  
「まさか」  
「瓢箪から駒、豚から真珠なんです」  
麗子の感激が鉄仮面の鉄を熱くしたかもしれない。  
「ボ、ボクに、百歳で子供ができるなんて。  
おお、ボクは平凡な子煩悩になりますとも。  
ありがとう、ありがとう」  
麻暮は麗子を優しく抱いた。  
様子を見ていた金之助も郷田も立原も、開いた口がふさがらない。  
(君子豹変す、だわ)  
と郷田は思ったが、またの豹変だって有り得るとも思った。  
啞然とする面々のなかで、金助だけは穏やかに微笑みながら独り言をつぶやく。  
「枯葉が落ちて、新芽が出る。  
ひとり死んで、ひとり生まれる。  
諸行無常の自然と人生は、あながいこれはこれで良くできているのかもしれない」

二〇三〇年、十月一日、午後一時。

郷田は自邸の応接間のソファで沈思黙考している。  
あるいは虚脱放心している。  
形ばかりの玄治の葬儀と麻暮正作の快気祝い。  
それら総てを郷田が仕切った。  
その後、各人の落ち着き先を相談するなかで、竹田金之助は、父親小林金助の居る未来コスモス院に住み込みで入り込むことになった。  
金之助は玄治の釣具屋を継ぐつもりだったが、老朽化した介護ロボットのタナカが、三ヶ月のメンテナンスが必要とのことがあった。  
金助が代わりに介護ロボットを拒絶したので、金之助が代わりにやることになったのだ。  
麻暮正作との同居を強く望んだ美村麗子は、マンションを引き払い、麻暮と郷田邸の二階を新居とした。  
これは郷田の好意と云うよりも、麗子に負い目のある郷田が押し切られてしまったのだ。  
麗子は身重でも鵜沼から鎌倉PC学園に通ったが、両親には何も伝えていない。  
子供が産まれたら伝えるつもりでいる。

(ちなみに、荒野大三郎の子供を宿した荒野蝶子も、麗子と同じ考えで同じ行動をとっている)

筋を通すことが探偵稼業での基本である郷田は、麗子の考えに反対し何度も説得したが、無駄骨に終わった。

三日前には、年内引退予定の鎌倉署の山風健一署長から、郷田への依頼があった。湘南に偽札が氾濫していて、その出所を掴んでほしいとの依頼であった。

郷田は麻暮には内緒であれこれ動いて来た。

手下を使うことに長けている麻暮とちがって、郷田は細かいことでも自分でやらなければ気が済まない性格なのだ。

大好きな季節を満喫することもできない、十日間でのこれら慌ただしい動きが、郷田を沈思させ虚脱させているのだ。

疲れ果てた精神と肉体を持って余しながらも、郷田はふと未来計画カンパニーの実状を考えてみた。

ロボット派遣が主な仕事だが、クローン業界に押され気味である。

荒野と曾孫の美々が社長交代して、しばらくは順調だったが、こここのところ経営不振状態が続いている。

山風の情報によると、川上宙門が秘書を解雇し自分が秘書におさまっているとのこと。

川上が玄に殺害されたのではなかった事実を知ると、未来計画カンパニーが偽札製造と関係があるのではないか。

郷田はそう推理した。

仕事にあぶれたロボットたちを使えば、偽札製造はそう困難な作業ではあるまいと踏んだ。

さて問題はこれからで、いままで通り自分ひとりで動くのか、それとも麻暮正作の力を借りるのか。

いつもの郷田なら遠慮なく麻暮の力を借りただろうが、平凡な子煩悩になると公言している麻暮に相談するのは躊躇われた。

竹田金之助は慣れない父親の介護で大変だし、立原正男はいわば堅気だ。

山風にはメールで経過報告をしているが、依頼人である山風に仕事を依頼するのは本末転倒だ。

あれこれ思案はしたが、郷田は結局ひとりで動くことに決めた。

二〇三〇年、十月二日、午前五時。

郷田は未来計画カンパニーに忍び込んで居る。

沢山の防犯カメラの在処や、裏口の扉の開け方などは、以前に竹田金之助から細

かく聞いていたので、難なく忍び込めたのである。

郷田は迷わず地下に向かった。

探偵の勘である。

もし偽札を製造しているとしたら地下しか有り得ない。

地下一階と地下二階の様子を伺ってから地下三階に行った。

他の階には小さな非常灯がついていたが、地下三階ま真っ暗である。

郷田は懐中電灯で照らしながら一部屋一部屋覗いて行った。

いちばん奥の部屋は鍵が閉まっていた。

ピンでしばらく弄っていると鍵が開いた。

忍び足で入って行った郷田は、すぐに偽札製造機らしきものを発見した。

懐中電灯で上から横から調べた郷田は確信した。

そのときロボットのガードマンが入って来た。

郷田は部屋の隅に逃げたが、すぐに掴まり投げ飛ばされた。

のみならずロボットの硬いパンチを顔にも胸にも腹にも浴びた。

郷田も歯向かったが歯が立たなかった。

それでも郷田は這って逃げた。

ロボットは追って来たがそれほど足が早くなかったのが幸いした。

命からがらビルの外に飛び出ると、もうロボットは追っては来なかった。

足はやられなかったもので、何とかBMWの駐めてある場所まで、酔っぱらいさながら千鳥足で歩き運転席に転がり込んだが、運転する自信はまったくなかった。

郷田は山風署長に電話を入れた。

早朝だったが、山風は電話に出た。

「署長、偽札、製造所は、未来計画、カンパニーの、地下三階、です」

青息吐息で切れ切れだったが一応伝えると、スマホを落としそのまま気を失った。

「郷田さん、郷田さん、大丈夫ですか、大丈夫ですか」

声をかけ続けたが返事がないので、山風はGPSで郷田の居場所を確認すると、江ノ島の駐在に連絡をした。

救急車を手配する旨も伝えた。

郷田が〈救急指定／江ノ島聖聖病院〉に運ばれたことを確認した山風は、すぐに麻暮正作と竹田金之助にメールを送った。

**【郷田さんが大怪我をして、江ノ島聖聖病院に収容されました】**

二〇三〇年、十月二日、午前九時。

山風、麻暮、金之助の三名は、江ノ島聖聖病院のICUの扉の前に立ち尽くしている。

「郷田さんの容態はどうなんですか」

後から来た金之助が山風に聞いた。

「まだ意識不明の重態です」

山風は苦渋の面持ちで答えた。

どうしてこんなことに、と金之助はまた聞いた。

「交通事故でも起こしたのですか」

「医者が怪我の状態から判断して、人為的なものではなくロボットに暴行された可能性があると」

山風はまた苦渋の面持ちで答えた。

「人間に暴行するロボットなんて聞いたことがありませんが」

金之助は首を傾げた。

「おそらく、未来計画カンパニーのガードマンのロボットにやられたのでしょう」

山風は深い溜息をついた。

「ガードマンと云うと、郷田さんは暗いうちに未来計画カンパニーに忍び込んだわけですか」

(もし忍び込む必要があるなら、どうして専門家の自分に云ってくれなかったのだろう)

金之助はまた首を傾げた。

私がいけないのです、と山風は深く頭を下げた。

「近頃湘南で出回っている偽札の出所を調査してくれるよう、郷田さんに依頼したのです。

さすがは優秀な探偵で、未来計画カンパニーの地下三階が偽札製造所になっていることを突きとめました」

「山風さんのせいではありませんよ。

同じ家に住んでいるボクが迂闊だったのです。

郷田さんはきっと、新婚気分のボクにも父親の介護で大変な金之助さんにも、助っ人を頼みづらかったのでしょう。

ただいづれにしても、郷田さんは大仕事をやってのけました。

いまのボクたちは、ヒーローが目覚めるのを祈るしかありません」

表情は鉄仮面に隠されて解らないが、麻暮の声は山風以上に苦いものであった。

金之助は頷くと、ICUの扉の近くの長椅子に坐り、山風と麻暮にも坐るよう促した。

ふたりが坐ると、金之助は声を落として、

「山風署長、それで、未来計画カンパニーの捜査は、いつ開始するのですか」

山風はまたまた苦渋の面持ちで、

「ところが、一時間前に捜査員が未来計画カンパニーの地下三階に踏み込んだとき  
には、総てがきれいに片付けられた後だったのです」

「口惜しいがさすがですね。

首謀者はやはり荒野大三郎でしょうか」

金之助は憎々しげに荒野の名を挙げた。

山風はしばし間を置いてから、

「社長交代してから、荒野は完全に未来計画カンパニーから手を引いています。

その未来計画カンパニーが、このところ経営不振状態が続いています。

そこで、川上宙門が秘書を解雇し自分が秘書におさまって、経営のテコ入れをしています。

ですから、偽札製造の首謀者は川上である可能性がとても高いと思われます」

(どうして玄さんは川上を殺さなかったのだろう。

そしてどうして、玄さんはボクに川上を殺したと報告したのだろう)

麻暮はその理由をあれこれ考えてみたが、答は出なかった。

それで麻暮は逆転の発想で考えてみた。

(玄さんが川上を殺さないことに決めたとしたなら。

そうか、川上がきつと荒野と縁を切ると約束をしたのだ。

そうでなければ川上は、莫大な資産を持つ荒野に会社救済を進言したはずだ。

と云うことは、バリアーを解除したのは、川上だったか)

それでもまだ賦に落ちないので、念のために山風に聞いてみた。

「川上と岬美々社長との関係は、秘書と社長の関係のみですか」

「ふたりはいま夫婦なのです」

山風は即座に答えた。

麻暮の疑問は解決した。

(そうか、そうだったのか。

美々社長は、玄さんに対して、川上の命乞いをしたのだ。

もしかすると、川上を殺すならその前に私を殺して、とかなんとか、美々社長に云われたのだろう。

自称冷酷な殺し屋の玄さんも、女に手をかけたことは一度もない)

麻暮は玄の鷹に似た鋭い眼を思い出した。

同時に兔に似た愛嬌のある口元を思い出した。

(つまりは玄さんが川上の命をとらなかったために、ボクは助かった。

つまりは玄さんが川上の命をとらなかったために、郷田さんは瀕死の重傷を負った)

「川上め」

金之助が吐いたので、麻暮は金之助の肩に手を置いて、

「川上の指図ではないでしょうよ。

ロボットのガードマンも役目を果たただけでしょうよ。

やはり郷田さんをひとりぼっちにさせたボクが悪い」

でも、と金之助は珍しく異議を唱えた。

「川上は偽札製造の首謀者です」

「それも愛する美々社長のためでしょうよ」

「麻暮先生が川上の肩を持つのは、なにかわけがあるのでしょうか」

（もしそうなら、ボクは川上の肩を持っているのではなく、玄さんの措置を正当化したいのだ）

と麻暮は思ったが、そうは云えずに、

「肩ではなく指先を持っているくらいですよ」

金之助は山風を見て、

「署長としては今後どうなさるおつもりで」

山風はICUの扉の向こうを視る眼をして、

「いまは偽札問題はペンディングです。

何よりも郷田さんの容態が心配ですから」

金之助は納得の表情だった。

ICUの扉を看護師が出たり入ったりした。

それからふたりの医師が入った。

ひとりの医師が出て来たとき、

「どうかしたのですか」

と聞いた。

医師は淡々とした声で、

「患者の意識が戻ったのです」

「入ってもいいでしょうか」

と山風が聞いた。

「おひとりだけ、しかも五分だけ」

医師が偉そうに云った。

山風はその「おひとり」に麻暮を指名した。

麻暮は遠慮したが、金之助に背中を押されて入った。

繃帯だらけの郷田がベッドの上から麻暮を視た。

すまなかったね、と麻暮は声をかけた。

「ボクとしたことが気づかなくて」

郷田は擦れた声で、

「すまないのは、あたしよ。

やっぱり、麻暮さんに相談すればよかったわ。

あたしってさあ、見栄っ張りだから」

「しかし、よかった、ほんとうに、よかった」

鉄仮面が小刻みに揺れていた。

郷田は手をのぼすと、麻暮の手を握りかよわく引き寄せた。

そして麻暮の耳元で、

「捜査は入ったの」

と聞いた。

麻暮は山風から聞いたことを正直に話した。

「やっぱりね。

でも、未来計画カンパニーはほどなく倒産するわね」

郷田は云うと、もう一方の手に握っていた小さなチップを麻暮に見せた。

「これは何ですか」

これがね、と郷田は自慢げに云った。

「偽札製造機の基本データよ。

これがないと、あの機械は宝の持ち腐れよ。

あたしは転んでもタダでは起きない性分なの」

「よくやった、大手柄じゃないですか。

さすがは天下一の探偵、郷田さん」

麻暮は大袈裟に誉めた。

郷田は素直には喜ばず、

「天下一の称号を麻暮さんから奪うのは、十年早いわ。

あたしはせいぜい湘南一かな」

麻暮はまだまだ郷田を励ます気持で、

「今年の問題は総て湘南で起きていますから、湘南一は天下一と云うことですよ。

ケケケ」

郷田は痛々しく笑って、

「麻暮さんのケケケを聞いたら俄然元気が出て来たわ。

すぐ退院しようかしら」

麻暮は諭す口調で、

「郷田さんは働き過ぎました。

一ヶ月ばかり病院で静養しても、だれも文句は云わないでしょう」

「一ヶ月なんか耐えられないわ。

なぜって、ここキリスト教系でしょ。

あたしはさあ、宗教ってみんなダメなの。

三十五年前、あたしの兄が、地下鉄でサリンにやられちゃってね。

まだ少年なのに苦しんで苦しんで死んだわ。

それから宗教がトラウマになっちゃって。

オウム真理教とキリスト教をいっしょくたにしちゃったらクリスチャンは怒るでしょうけど、あたしは大差ないと考えてるのよ」

「でも郷田さんはどこか、キリストみたいなところがありますがね。

それにしばらく入院してくれれば、ボクは彼女と遠慮なくいちゃいちゃできますし。

ケケケ」

しかし郷田は、麻暮の鉄仮面の奥が燃えているのを感じていた。

「麻暮さん、あたしの復讐なんかやめてね。

右の頬をぶたれたら、左の頬を出しましょ。

だいたい、身から出た錆なのに、だれに復讐するって云うのよ」  
このとき麻暮は、荒野大三郎のことを考えていたのだ。  
未来計画カンパニーの危機に、荒野が黙っているわけではない。  
再び大仕掛けの何かをやらかすにちがいないと、推察していたのだ。  
唐突に看護師が入って来て、  
「はい、五分経ちました」  
とシスター口調で告げた。

二〇三〇年、十月二日、正午。

山風、麻暮、麗子の三名が喫茶店「帰路」に集まっている。  
山風、麻暮の二人は江ノ島聖聖病院から、秋晴れのなかを揃ってここに来た。  
竹田金之助は金助の面倒を見なければならないので、申し訳なさそうに未来コスモス院に戻った。

麗子は麻暮がわざわざ呼んだ。

最近の麗子は、麻暮が近くにいない時間が長引くと、情緒不安定になるからだ。

立原が、サンドイッチ、スパゲッティ、サラダ、スープ、コーヒーの、ランチセットを全員に用意した。

「それにしても郷田さんは良かった。

はじめはどうなることかと思いましたよ」

山風が安堵の溜息を漏らした。

「前よりも元気になるかもしれませんが」

麻暮は山風を元気づける気持で冗談めかして云った。

あとは、と山風は改まった口調で云った。

「偽札製造機が使えなくなった未来計画カンパニーが、どう出るかですね」

「郷田さんは、未来計画カンパニーがほどなく倒産すると云っていましたが、ボクにはそうは思えないんですよ。

美々社長や秘書の川上が、頼もうと頼むまいと、創設者である荒野が黙っているとは思われない。

となると、偽札レベルの話ではなくなる」

旦那さまは、と麗子が口を出した。

「ちょっと考え過ぎよ。

お蝶さんがついてるんだもの、荒野さんも物騒なことはもうやらないでしょう」

「〈旦那さま〉はやめてもらえませんか、美村さん」

「〈美村さん〉もやめてください。

もう、麗子と呼んで」

麻暮はしばし躊躇ってから、

「なら、麗子。

麗子は、正作と呼んでください」

「はい、正作さん」

ふたり見詰めあったので、山風は思わず赤面してしまった。

しばし間を置いて山風は麻暮に聞く。

「荒野はこんどは何をしかけてくるのでしょうか」

「それが読めない。

長年のつきあいだから、何かしかけてくることは解るが、それが何かが解らないのです。

麗子は、お蝶さんがついてるから心配ないと。

心配症のボクは、その逆なんです。

彼女がついているから、余計に心配なんです。

つまり、あのふたりの思惑が、ある種の誤解と云う次元で一致してしまったら、尚更何をしかけてくるか解らなくなる」

「それなら待つしかないか。

本来警察は待つしかないものなのです」

「その警察勤めも年内までとか。

その後はどうするつもりですか」

山風は苦笑して、

「探偵になるにしても、麻暮さんや郷田さんには適わないし、荒野のことは心残りですが、年貢の納め時と観念して隠居しますよ」

山風が口惜しそうなので、麻暮は応じる術もなかった。

(今後は郷田さんだけを相棒としてやるしかないな)

山風がポケットから、極く小型の銃を取り出した。

「麻暮さん、これを持っていてください」

「これは」

「警察組織で開発されたばかりのレーザーガンです。

相手を殺すことはできませんが、二十四時間全身麻痺にさせます。

しかもロボットにも有効のスグレモノ。

これはせめてもの私のプレゼントです」

麻暮は躊躇わず丁重にレーザーガンを受け取った。

麗子の顔色が変わった。

「正作さん、忘れてやいませんよね。

平凡な子煩悩になるとの約束」

麻暮が再び死地に飛び込むのではないか、と麗子は気が気ではなかったのだ。

二〇三〇年、十月三日、正午。

荒野と蝶子は、元メンテナンス室の新居で、ランチをとっている。  
蝶子のつわりが始まったので、ランチにかぎらずキッチンには荒野が立つ。  
今日のランチは、蝶子が希望した雑煮だった。

汁は薄口醤油と昆布ダシ。

そこにあらかじめ薄味で煮ておいた、里芋、椎茸、大根を入れる。

餅は三センチ四方に切って、レンジで焦げめがつくほど焼いたものを三個。

上から少々の三つ葉と海苔と柚子皮。

荒野は蝶子の食べる様子を窺いつつ、

「田舎雑煮デスガ、オ蝶サンノオロニ、合イマスカネエ」

「とても美味しいわ。

これは田舎ではなくて都会のお雑煮ね。

わたしの祖母は東北の人だったからか、糰味噌だったの」

「ソレモイイデスネ。

プフイ。

明日ノランチハ、糰味噌ヲ使ッタ、雑炊ニシマショウネ」

荒野が優しい声で笑うと、蝶子も優しい顔で笑った。

蝶子が食べ終わると荒野はおもむろに、

「唐突デスミマセンガ、未来計画カンパニーガ、倒産寸前ナノデス。

曾孫ノ美々モ、頑張ッテイマスカラ、私ノ方デ、新シイ事業ヲ起チアゲタイ」

蝶子は真剣な眼差しを向けて、

「それは助けてあげないといけませんね。

何かメドはあるの」

荒野は黄金仮面の奥の両眼を光らせて、

「ソレヲ、オ蝶サンニ、考エテ戴ケナイカト。

ロボット達ガ、暇ヲシテイマスカラ、彼等ノカデ、簡単ニ作レソウナ物」

蝶子は余り考える風でもなく、

「それなら薬はどうかしら」

荒野は賛同の拍手をしそうになったが忪えて、

「薬デスカ、薬ハ難シイデショウ」

「難しくなんかないわ」

荒野の思惑通り蝶子はムキになっている。

「タトエバ」

「そうね、私は頭痛持ちだから、すっごく効く鎮痛剤が欲しいわ」

「ソレナラ、覚醒剤トカ違法ノ物デハナク、アスピリン、モルヒネ、医療用大麻ア  
タリデショウカ」

「どこの病院でも常備しているものなんか、意味がないわ。

そういうものより、もっと効く、もっと貴重な薬。

医学博士の木下さんが亡くなったのは痛いけど、科学博士の川上さんなら、そう時間をかけずに作れるはずよ。

有能なロボットたちもいるし」

「川上ハドウイウワケカ、私ト距離ヲ置キタガッテイマス」

荒野は上目遣いで蝶子を視た。

「いいわ、美々さんと私とで説得するから」

「オ蝶サンハ、ヤッパリ頼リニナリマス。

デモ医薬品ハ、資格トカ許可トカ、厄介デスカラネエ」

荒野はまた上目遣いで蝶子を視た。

「正規のルートだと時間がかかり過ぎるわね。

未来計画カンパニーは切羽つまっているんでしょ。

本当に苦しんでいる病人のためなら、裏の裏のそのまた裏のルートでもいいんじゃないかしら」

オ蝶サン、と荒野は声をあげた。

「ヨク云ッテクレマシタ。

サスガハ私ノ見込ンダ女性、イヤ配偶者」

「配偶者なんて厭なことばね。

同胞とか同志でいいわよ」

「オオ、同志ヨ。

未来計画カンパニーノ復活ガ、見エテ来マシタ。

プフイ、同志ヨ。

明日カラ、行動ヲ開始イタシマシヨウ」

「今日からよ」

蝶子の言葉は力強かった。

誘導剤を雑煮に入れておいて正解だった、と荒野はほくそ笑んだ。

じっさいのところは誘導剤の効果ではなかったのだが、荒野はそうは考えなかった。

二〇三〇年、十一月一日、午前十時。

郷田の退院日なので、麻暮と山風の二人は、江ノ島聖聖病院に居る。

郷田の支度が済むまで、二人はロビーに居る。

山風が麻暮に小声で声をかける。

「最近湘南でヤクが出回っているんですよ」

麻暮も噂で聞いたことがある。

「覚醒剤ですか」

「それが特殊なクスリで」

特殊とは、と麻暮は聞いた。

「なにか困った特殊ですかね」

「まずはクスリを体内に入れた後の、快樂がハンパではないらしい。

そしてクスリは高額で、常習性も高く、それもハンパではなく、数時間しか我慢できない。

話はそれで留まらず、たとえば金の都合がつかなくて丸一日我慢するとします。

すると、体内から発する異臭が、これもハンパではないのだが、クスリを入れるまで消えません。

それで、クスリを手に入れられない者は、自分の異臭に気づくとそれに耐えられず、発狂するか自殺するか、そういう人が頻出しています」

山風は渋い顔だった。

「うーむ、異臭人間の発生ですか、厄介ですね」

麻暮も渋い声調だった。

「その臭いを嗅いだ人の話では、腐った魚、腐った卵の百倍臭いと云うんですから、死臭のレベルもはるかに超えています」

「それは発狂するか、自殺したくなりますね。

そんな状態で発狂も自殺もしないのは、ボクのお師匠さんくらいのもんでしょう」

「これを単純に考えますと、もし湘南の人々の多くがこのクスリに手を出して、その後何かの原因でクスリそのものが消滅したとしたなら、湘南の人々の大半は発狂者か自殺者と云うことになります。

この状況が湘南にとどまらず、日本中、世界中となったら、大袈裟ではなく人類は壊滅します」

念のために麻暮は聞く。

「クスリを買わないよう通告はしているんですか」

「それはやってはいますが、厄介なことに、コンビニなんかで売っている各種ボトル飲料なんかに混入していますから、知らずに中毒になる人も多いのです。

それでまたボトル買ってクスリが混入しているものとはかぎらないから、売人を必死で探して金を積んで手に入れる」

「飲むクスリですか」

「飲んでも、注射しても、吸引しても、嗅いただけでも、効果があります」

「それはますます厄介ですね」

云って麻暮は荒野大三郎を想った。

(荒野め、次はこう来たか)

先入観かもしれないとは思いつつ、麻暮には荒野のしわざとしか思われなかった。

支度を済ませた郷田がロビーに降りて来た。

山風と麻暮の姿を確認すると、笑顔で、

「心配をおかけしましたが、この日が来てとっても嬉しいわ。

わざわざ来てくれたことは、もっと嬉しいわ」

山風も笑顔を作って、  
「麻暮さんが、前よりも元気になるかもしれないと云っていましたが、本当にそう  
なりましたね」

「ねえ、また快気祝いをやりましょうよ」

郷田が自分から云うと、真っ先に麻暮が賛成して手を挙げた。

「ただし、今度はボクがキッチンに入りますね」

「なにそれ、つまらないわ。」

いま解ったけど、快気祝いにかぎらずお祝いってさ、されるよりもするほうが楽  
しいものなのね」

「ケケッ。」

それは、郷田さんがいい人だからでね」

麻暮に誉められて、郷田は照れ笑いをした。

郷田邸まで山風がクルマで送ってくれた。

仕事があると山風が引き上げようとする、麻暮が声をかける。

「例の件はボクの方で対応してみます。」

報告するときは解決したときかもしれませんが、予めご容赦を」

「例の件って何よ」

郷田が気にすると、麻暮は、

「後で説明します」

と云って、山風に手を振った。

二〇三〇年、十一月一日、正午。

麻暮と郷田は麗子が作ったランチを食べている。

つわりの軽い麗子は、退院した郷田のために、揚げ立てのカツを乗せたカレーラ  
イスと、十種の野菜を使ったスープを作った。

「美味しい、美味しい、麗子さんがこんなに料理上手とは知らなかったわ」

郷田は舌鼓を打った。

麗子は嬉しそうに、

「郷田さんは相変わらずお世辞が上手ね。」

ずっと病院食ばかりだったからでしょう」

「あたしはそれほど真面目な病人じゃないわ。」

病院内の売店で買ったカップラーメンばかり食べていたわよ。

だいたいさあ、人間も濃くできているから、薄味はダメなのよ」

「売店でボトル飲料は買わなかったでしょうね」

「あたしはスポーツドリンクよりも缶コーヒー派なのよ」

「ケケケ、それは良かった」

「どうして良かったのよ」

「じつは、例の件と云うのは」

麻暮は、山風の話を手色抜きでそのまま郷田に伝えた。

郷田は黙って聞いていたが、麻暮の話が終わると、

「それで、あたしに困りなれって云うのね」

「困捜査なんて、悠長なことはやってられませんよ。」

郷田さんには、ヤクの中毒者を装って、まずは売人を捕まえてほしいんです。

たぶん売人は、未来計画カンパニーのスタッフかロボットでしょう」

「捕まえたら厳しい拷問でもして、あたしがロボットのガードマン野郎にやられたより苛酷な目に遭わせて、黒幕が荒野大人だって無理矢理白状させればいいのよね」

云いつつ郷田は、己の復讐心の強さに我ながら呆れてもいた。

「ケケッ。」

ボクは荒野が黒幕だなんて、断言してはいけませんよ」

「断じなくても、この件に麻暮さんが関わるってだけで解るわ」

「まだ推察の段階です」

つと、麗子が口を挟む。

「それって当たっているかも。」

じつはお蝶さんが以前から、医療用の麻薬に関心を持っていたのね。

医療用のモルヒネとか大麻とかのレベルではなく、もっと患者が楽になるクスリはないかってね。

彼女の大好きだったお婆さんが、末期癌でとてもとても苦しんだものだから。

お蝶さんはいま、荒野さんと一緒にいるはずだから、そのことを話したって不思議ではないわ」

郷田は真面目くさった顔になって、

「つまり麗子さんは、お蝶さんが荒野大人に、ヤクの件を示唆したと考えるわけね」

「でも、お蝶さんの示唆と荒野さんの実際の活動とは、おそらく乖離があると思うの」

「乖離があったって、具体的な被害が世間に出ていけば、お蝶さんも話がちがうって思うはずよね」

「そこが気になるのよ。」

もし正作さんの推察通りで、わたしの推移通りだとしたら、お蝶さんはいま無事ではないわ」

「麗子さんもなかなかの探偵よね。」

とにかくその線を頭に入れた上で動くとするわ。

黒幕をつきとめただけじゃ済まないかもしれないからねえ」

覚悟を決めた風の郷田に、麗子は頭を下げた。

「すみません、よろしくお願ひします」

麗子さんって、と郷田は皮肉っぽい口調で云った。

「本当に従姉思いよね。  
向こうが従妹思いかは疑問だけどさあ」  
お蝶さんは、と麗子は素直な口調で云った。  
「私をととても大切にしています。  
それはよく解っているの。  
いまは道がふたつに分かれてしまっているけど、いずれその道はひとつに合わさるはずよ」  
「あたしもそう思いたいわ」  
郷田はやはり、皮肉っぽい口調だった。  
(ボクの推察が当たっていたなら)  
麻暮も覚悟を決めた。  
(こんどこそ荒野を抹殺しなければならない)

二〇三〇年、十一月二日、午後五時。

郷田は自邸の別館に居る。  
さっそく売人を捕まえて別館に監禁したのだ。  
まだ麻暮には報告していない。  
黒幕が荒野だと白状させてからにするつもりだった。

郷田が捕まえた売人は、美々社長の元秘書だった。  
「あんたはあたしのタイプなんだけどさあ。  
あんたもすっかりおちぶれたわねえ」  
郷田が呆れ顔で云うと、鉄鎖に繋がれた元秘書は泣きべそをかきながら、  
「何とでも云ってくださいな。  
僕だって食っていかなきゃなりませんから」  
と居直った。  
郷田はわざと凄んで、  
「好きなだけ、ほざけ。  
ほざけるうちは、何度でもほざけ。  
もうすぐ、ほざく元気もなくなるよ。  
首謀者の名前を云ってくれないと、あんたは十分に一本ずつ指を失うことになるんだからね」  
「僕はたかだかクスリの売人ですよ」  
郷田は厳しい声で、  
「我が国は薬物犯罪に甘過ぎるのよ。  
フィリピンくらいのことをしなくちゃ、薬物犯罪は減らないわ。」

中国は阿片戦争の二の舞いは御免だからって厳しいけど、我が国だってこんな調子じゃ阿片戦争になるわね」

それからわざと、優しく甘い声を作る。

「ねえ、ねえ、どの指からにしましょうかあ。

ご希望を聞くわん。

親指は痛そうだから、小指にしましょうかあ。

それとも先に、足の指がいいかしらん。

あたしはどっちでもいいけど、あんたにもご都合があるでしょう。

ちゃんにご意向を聞くから、安心してねん」

「ご意向は、指ではなく歯だな。

虫歯がひどいから、ひとおもいに抜いてくださいな」

元秘書はまだ強がった。

郷田は苛々し出して、

「この糞ったれちゃん。

小便もらさないようにしなよ」

砥石でよく磨いた匕首を手にした郷田は、掛け声もかけずに淡々と、元秘書の右手の小指を切り落とした。

(因にこの匕首は玄治の形見であった)

まさか本当にやるとは思っていなかったのか、元秘書は激痛の叫びを挙げる前に、呆然とした。

すぐに郷田は、右手の薬指も切り落とした。

「どうせ白状しないわよね。

面倒くさいから、どんどんやっちゃおうっと」

つぶやきながら郷田は、右手の中指、人さし指、親指と、十分に一本ずつの見解を破って、十秒に一本ずつ切り落とした。

元秘書は失神したかったはずだが、失神もできずに泣きわめいた。

「どうせ白状しないわよね。

こんどは左手だけど、さっさと済ましちゃおうっと」

つぶやきながら郷田は、元秘書の左手の、小指、薬指、中指、人さし指、親指と、三秒に一本ずつ切り落とした。

元秘書の号泣は止まる暇もなかった。

「ここは防音装置付きだから、泣いたって喚いたってだれにも聴こえないんだあ。はてさて、どうせ白状しないわよね。

次は足だけど、かったるいから、全部まとめてやっちゃうかな。

そうしたほうが水虫もなおっちゃうよっと。

でもさあ、手の指はなくても歩けるけど、足の指がなくなったら歩けるかしらん。

これは面白い実験になるかもねん」

つぶやきながら郷田は、元秘書の靴下の先っぽを、指先でつまんで引張った。

元秘書の足元には、血だまりと小便だまりが出来ていた。

「もう、や、や、やめて。

しゅ、しゅ、出血多量で、し、し、死んじゃう。

しゅ、しゅ、首謀者は、あ、あ、荒野元社長、です。

き、き、聞こえなかったら、な、な、何度でも。

しゅ、しゅ、首謀者は、あ、あ、荒野元社長」

元秘書は身悶えしつつ白状した。

郷田は一応蝶子の様子を聞いた。

元秘書は途切れ途切れに、身重だから大切にされてはいるが、軟禁状態と云ってもいいと答えた。

郷田は元秘書の両手の傷口を消毒し、血止めの軟膏を丁寧に塗ってから、やはり丁寧に繃帯で巻いた。

それから解放した。

郷田は録音テープを手に、本館の二階に向かった。

郷田の姿を見るなり麻暮は、

「ずいぶんと派手にやったみたいですね。

血の臭いもしますよ」

麻暮さんなら、と郷田は苦笑して云った。

「あたしの十倍は派手にやったでしょうよ。

十倍じゃない、百倍。

だから血の臭いは、麻暮さんの鼻の穴にこびりついた臭いなだよ」

ケケッ、と麻暮も苦笑した。

「そうかもしれませぬね。

とにかく郷田さん、厭なお役目ご苦労さま」

郷田は麻暮にテープを渡し、

「出血多量で気絶する寸前に、白状したわ。

ご推察通りだったから、ちょっと拍子抜けだったけどさ」

「血も涙もない人ね」

と麗子がさりげなく云うと、郷田は鼻で笑って、

「それはあんたの旦那さまに云ってよ。

あたしは麻暮さんの命令でやっただけなもの」

麗子は鼻白んだが、何よりも聞きたいことがあった。

「お蝶さんは、お蝶さんは」

「お蝶さんなら監禁されているわ。

妊娠中だと云うから、お腹の子が心配ね」

郷田はいささか脚色した。

蝶子に対する怨みがそう云わせたのだった。

「お蝶さんが、妊娠。  
ホントに妊娠なの」  
信じられない気持だった。  
たとえバーチャル・セックスくらいはしたとしても、従姉は〈永遠の処女〉を貫く人だと思い込んでいたのだ。  
「瀕死の彼が嘘を云う余裕なんかあるかしら。  
おめでた、おめでた、おめでたいじゃない。  
あたしなんか子供産めないから羨ましいかぎりよ」  
郷田はそっぽを向いて云った。  
「となると、荒野の子か」  
麻暮は複雑な思いだった。  
また松本大海（【主な登場人物紹介】参照）みたいな厄介な男の子が誕生するのか。  
それとも猪鹿蝶子みたいな厄介な女の子が誕生するのか。  
「それで麻暮さん、これからどうするつもりなの。  
こんど未来計画カンパニーに乗り込むんなら、ロボットにやられないように、わたしも武器を用意するからね」  
「ケケケ。  
また入院は可哀相だから、あとはボクがやりますよ」  
麻暮がそう云うと、郷田は納得の表情をしたが、麗子は納得しなかった。  
私も、と麗子は縫る調子で云った  
「正作さんと一緒に行くわ。  
お蝶さんも心配だから」  
麻暮は慌てて、  
「それだけは勘弁してください。  
麗子には子供を生むと云う大切な役目があるでしょう」  
「なら、私の代わりに郷田さんが一緒に行ってあげて」  
「代わりなの。  
あたしは代わりなんか厭だなあ」  
そう郷田は云ったものの、はじめから行く覚悟はできている。

二〇三〇年、十一月三日、午後一時。

郷田と麻暮は未来計画カンパニーに忍び込んでいる。  
準備に三日はほしかったが、文化の日で休みだからこの日に決めた。  
勝手次第に行動する郷田に従って、麻暮も地下三階に向かった。  
偽札製造機があった部屋の扉をこじ開けると、案の定そこは見るからにクスリ製

造所になっていた。

クスリはベルトコンベアー式に製造されていて、休日担当のロボットたちが一斉に郷田と麻暮を視た。

ガードマンではなくあくまでも労働者のせいだろう、歯向かって来そうにないロボットたちを、麻暮は（腰のポシェットから取り出した）あのレーザーガンで、一体一体眠らせた。

「この機械にも基本データチップとやらがあるのかな」

麻暮がつぶやくと、郷田はすでにその在処を見つけていて、基本データチップを抜き取った。

ベルトコンベアーが止まった。

「こんな莫迦でかい機械作ったって、こんなちっぽけなものがないと動かないんだから、やっぱり I T 化って問題あるわよね」

「ケケッ。」

ボクは生涯アナログ人間だけど、このレーザーガンはなかなかいけるね」

「ずいぶんとあっさり済んじゃったわねえ。」

さあ麻暮さん、この部屋もこのビルも爆破しちゃいましょうよ」

背負ったリュックを下ろして郷田が云うと、

「郷田さんは乱暴でいけません。」

「だいたいそんなこと、予定にあったっけ」

麻暮は難色を示した。

「予定も何も、そんなこと相談するヒマもなかったじゃないの」

「ともかくチップをゲットしたのだから、ここはよしとして、十三階に行きましょう」

「そうね、爆破は云ってみただけ。」

あたしと乱暴は、月とスッポン、真珠と豚、オカマとヤクザよ」

静かに階段を登って十三階に行き、開かずの間の扉に手をかけた。

思った通り鍵はかかっていなかった。

ふたりが中に入ると、自動的に皓々たる LED がついた。

「メンテナンス室が怪しいわね」

郷田が壁を押すと、そこは豪華な住居に変わっていて、隅に小奇麗な小部屋があった。

「荒野よ、ボクだ、出て来い」

麻暮が叫ぶと、小部屋の中から微かに、

「麻暮さん、麻暮さん」

と声がする。

「その声はお蝶さんだね」

麻暮が小部屋を蹴破ると、たしかに蝶子がいた。

べつだん鎖に繋がれているのでも、クスリを注射されている風でもなく、普段着

でソファに坐っていた。

窶れた感じもなく、相変わらずの美貌だった。

「その様子では、監禁されているわけではないんだね」

麻暮が声をかけると、

「それが、監禁されているの。

この小部屋から一センチでも外へ出ると、すごい勢いで卒倒する。

何度か試みたんだけど必ず卒倒するので、もうやらないようにしてる。

お腹の子のために」

「きっと、軀のなかにチップを埋め込まれたんだわ」

郷田が確信的に云うと、

きっとそう、と蝶子も確信的に云った。

「けれど、いくら自分の軀をチェックしても、それがどこにあるのか解らない」

どうして、と麻暮は聞いた。

「こんなことになったんだい。

君はいま荒野の奥さん同様に、お腹のなかの子は荒野の子なのに」

「だから、殺されずに済んでるのよ。

幼稚なわたしは、まんまと彼の魂胆にひっかかったみたい。

彼はクスリで世界壊滅を企てている。

それを知って、麻暮さんはここまでやってきたんですよね」

「ケケケ、その通り。

だけど、ボクはあなたを信用していない。

お蝶さんはひっかかったんじゃないじゃなくて、荒野を唆したんじゃないのかね」

「結果的にはそうかもしれない。

でもどうして、わたしが禍々しい世界壊滅なんか。

子供が生まれるって云うときに」

「そこが人間の深層の複雑なところでね。

ボクが見るところ、あなたは完璧なナルシストだ。

あなたに比べれば、郷田さんのナルシズムも中途半端に思える」

「どうしてあたしが中途半端なのよ」

郷田は文句を云ったが、麻暮は無視して続ける。

「ケケケ、つまりさ、荒野の子を宿したと解ったとき、あなたですらそれなりの悦びがあったはず。

けれども産んで育てる気持にはなかなかない。

なぜならボクの推測では、女にならないまま母になったからだよ。

とは云え、あなたは墮胎をのぞまない。

荒野がのぞまないからではなく、赤子だけ殺すのは、あなたのプライドが許さないからだ。

そこで考えたのは、赤子との心中。

それは畢竟、あなたにとって世界壊滅ではないのか」

麻暮の声はドスが利いていた。

蝶子は麻暮から目を逸らし、天井を見上げた。

そして天井に向かって云う。

「他人の心のなかに勝手に入る権利は、だれにもないわ。

だいたい、邪推もいいとこね。

けれど、わたしの今までの行動を思えば、邪推したくなるのは当然かも。

ただ正直云うと、わたしは彼に洗脳されている気はするの。

100%ではないけど、そうね、70%。

だからわたしは30%で、彼の破滅を願っている。

荒野大三郎が破滅し消滅した、そのときこそ、わたしは彼の子を産んで育てる力が出て来るはず」

「恐るべき女ね、厭な女ね」

蝶子を嫌っている郷田が云った。

麻暮は聞かないふりをして、

「だいぶ正直になって来たが、まだ30%の正直だね。

いずれにせよ、荒野はボクが破滅させ消滅させるから、安心して子供を産みなさい。

ボクの子を宿した麗子と、おそらく同じ頃の出産だろうから、ふたりで励まし合えるだろうしね」

「麗子が、麻暮さんの子を」

あまり驚くことのない蝶子も、さすがに驚いた表情をした。

「どう云うわけか、そうなった。

ボクは望んでいなかったが、麗子は望んでいた。

だが、ボクもいままでは愉しみでしょうがない。

ボクはボクたちの子供のためにも、世界壊滅なんか許すわけにはいかないんだ。

いいや、云いなおす、ボクは世界の子供たちのためにも、世界壊滅なんか許すわけにはいかないんだ。

あなたには解らんだろうが、ボクの子と世界の子供たちは、同じなんだ。

ボクを偽善者と呼ぶ者がいたら、ボクはその言葉を甘んじて受けるつもり」

解るわ、と蝶子は云った。

「解りますとも。

わたしは今まで仕出かしたことを、とても後悔し、反省しているの」

そしてこんどは下を向いた。

ケケケボクはね、と麻暮は冷淡な声調で云った。

「ボクはお蝶さんがどう云おうとも、信じたりしないよ。

もしもあなたを信じたら、亡くなった玄さんや、心身症になった金之助さんや、大怪我をした郷田さんに申し訳ないからね。

ボクに云わせれば、あなたは後悔や反省から学ばない人だ。

ボクに云わせれば、あなたは他人を平然と裏切るが、自分をも平気で裏切る人だ。

ボクに云わせれば、あなたは天から二物を与えられたが、天に別の二物を奪われた人だ」

蝶子はひとつ溜息をついてから、

「何と云われたって仕方ないわね。

でも、わたしが天に奪われた二物って何かしら」

「そんなことより、荒野大人はどこにいるのよ」

郷田が声を荒げた。

「こんな状態のわたしが解るわけないわ。

解っていても教えるかどうかは解らないけど」

蝶子はそっぽを向いて云った。

「ますます厭な女ね。

あたしはチップ取りの名人だけど、あんたのチップは取ってやんないよ」

郷田もそっぽを向いて云った。

麻暮は思案していた。

(お蝶さんを人質にとって、荒野をおびき寄せようとしても無理かもしれない。

荒野はボクらがお蝶さんを殺せないのを知っている。

こうなったら、郷田さんが冗談で云ったことをやっつけてしまおうか。

このビルさえなければ、荒野はもはやだいそれたことはできまい。

それにもしかすると、荒野はこの巨大なビルのどこかにいるかもしれない。

だが、お蝶さんやロボットたちがまきぞえになる。

さて、どうするか)

麻暮はこの住居に隠しカメラがないかどうか、あちこち探ってみた。

その様子を郷田が視ていて苦笑した。

「麻暮さんったら、カメラを探しているのね。

それだったら、わたしがチェック済みよ。

ただ心配なのは、彼女の軀に埋め込まれたチップが、彼女を卒倒させるどころか、彼女を粉碎しないかどうかね。

彼女が粉碎されても自業自得だけどさ、まきぞえは厭だもん」

「なるほど、その可能性もあるな。

荒野ならやりそうなことだな」

麻暮が同調すると、蝶子ははじめて立ち上がって、

「荒野さんは、そんなことしないわ。

わたしはともかく、お腹の子は宝みたいに思ってるはず」

「あんたは、甘いよ。

甘い、甘い、甘い蝶の蜜。

その甘さが、荒野大人をつけあがらせてるんだわ。

あたしはもう我慢できない。

こうなったら、スッポンにも豚にもヤクザにもなっちゃうわ」

郷田は地団駄を踏んだ。

麻暮は郷田の背に腕を廻して、  
「まあまあ、落ち着いて。  
郷田さんらしくない、いや、郷田さんらしいのかな」  
「どっちなのよ」  
郷田はすねた。  
麻暮は郷田に耳打ちする。  
しかも蝶子に聞こえるくらいの声で。  
「じつはね、郷田さん、ボクは最初からこのビルは爆破することに決めていたんですよ」  
「げっ。  
すると、さっき素早く仕掛けたのね、時限爆弾」  
「そう、いま何時かい」  
郷田はスマホで時間を確認し、  
「十四時二十一分よ」  
「いけねえ、あと十分もない。  
お蝶さんには悪いけど、ボクらは退散しよう」  
麻暮は部屋を飛び出て、郷田も続いた。  
しかし、麻暮は階下に降りようとしなない。  
「あれっ、麻暮さん、もしかして」  
「ケケッ、嘘、嘘。  
盗聴器をしかけたから、まあ聴いてごらんなさい」  
ふたりして盗聴器に耳をそばだてた。  
蝶子が電話をしている声が聴こえる。  
「荒野さん、早く逃げて。  
このビルには爆弾がしかけられているの。  
爆発まで、あと十分足らずよ」  
「ほらね、荒野はこのビルのどこかにいる」  
麻暮は、してやっつたりの顔。  
「荒野大人は彼女を助けにくるでしょうね」  
郷田が云うと、  
「荒野のことだからひとりで逃げ出すでしょう」  
と麻暮が云った。  
「あたしたちは、どうするの」  
「賭けをしましょう」  
つまり、と郷田は聞いた。  
「つまり、手分けね」  
「そう、郷田さんはここで荒野を待ち伏せする。  
ボクは、ビルの非常口で待ち伏せする」  
「いいわよ。」

それで、と郷田は聞いた。

「荒野大人を発見したら」

「発見したら、郷田さんは七首で、ボクはこのレーザーガンで」

「殺しちゃうわよ」

郷田は真剣な顔で云った。

「それはそれで、荒野の運命」

麻暮は苦々しい声で云った。

「麻暮さんって、冷酷よね」

「荒野に対しては冷酷でないと」

「ううん、あたしに対して冷酷。」

あたしを殺人鬼にさせる気ね」

「なんなら、賭けを逆にしましょうか」

麻暮は提案をした。

「賭けを逆にするんじゃないくて、武器を逆にしたいわ」

と郷田は要求した。

「では、そうしましょう。」

郷田さんはレーザーガンで、荒野を二十四時間眠らせる。

ボクは七首で、荒野を永久に眠らせる」

麻暮と郷田は武器を交換した。

郷田と目配せをすると、麻暮は七首を手に階段を駆け降りた。